

# 平成 28 年度博物館協議会議事録（要旨）

## 1 概 要

日 時：平成 28 年 8 月 30 日（火）10:00～12:00

場 所：北九州市立自然史・歴史博物館 会議室

出席者：委 員：真鍋会長、泉副会長、岩松委員、奥田委員、緒方委員、木村委員、  
佐藤委員、染川委員、三島委員、丸山委員（欠席：伊澤委員）  
博物館：上田館長、山家副館長、井上普及課長、松井歴史課長、  
真鍋自然史課長ほか

議 題：

### 1 平成 27 年度事業実績（博物館年報）について

ア 概要

イ 特別展開催実績

- ・医は仁術展
- ・大正・昭和の暮らしと風景展
- ・ふしぎの教室展

ウ ジオパーク活動推進事業

エ NPO協働提案モデル事業

オ ユニバーサルミュージアム化事業

カ 世界遺産関連事業

### 2 平成 28 年度事業計画について

ア 概要

イ 特別展開催計画

- ・関門幕末維新伝
- ・発掘された日本列島 2016
- ・(仮) 翔～飛ぶ、駆ける、泳ぐ～

ウ 東アジア友好博物館交流事業

エ ジオパーク活動推進事業

- 松井歴史課長より進行がなされた。
- 上田館長、真鍋会長、泉副会長、各委員、博物館職員より挨拶があった。
- 真鍋会長の司会により議事が進められた。
- 博物館より議題 1、議題 2 について説明がなされた。

## 2 各委員による意見と質疑応答 ○委員 ●博物館

### 【特別展・企画展】

- 展覧会の連続性、またはストーリー性みたいなものが見えてこない。出し物としては

面白くとも、前の企画を振り返ることができないのが残念である。年度ごとに展覧会のテーマがあるなど配慮があると面白い。

- 展示の振り返りが出来るのはいい。実際に展示でやるのは難しいと思うが、ウェブサイトなどでこれまでの展示を体系づけてみたらどうか。例えば中生代から旧石器まで時系列があって、この展示はこの辺に位置付けられるというように体系づけるサイトがあると、自分学習とか振り返り学習ができるのではないか。

### 【博物館の評価方法】

- 年報には博物館の事業等が分かりやすく書かれているが、来館者・利用者が数値に換算されるだけになりがちである。博物館の事業が来館者・利用者にとどのような影響があるのかということ来館者数だけではない表現で資料化できないか。
- 5分くらいで終わる簡単なアンケートを実施してはどうか。予算は年々厳しくなっていくだろうが予算を確保するためには量的な部分と同時に来館者に展示や教育プログラムの効果があるという質的な部分を示すアイデアが必要である。
- アンケートの自由記述を質的に分析したことがある。テキストマイニングという手法を用いれば人が自由に書く文章を量的データに変換することが出来る。簡単な日本語のソフトもあるので、来場者アンケートに自由記述をしてもらえば子ども、大人などそれぞれのアンケートの分析が出来る。
- 専門家から実際に話を聞くことが大事である。学芸員が博物館の内外に関わらず生の言葉で伝えれば館の魅力がもっと伝わる。
- 小・中学校の入館者のうち、北九州の学校団体には学校単位でアンケートが採れる。子どもがリピーターとして来館すれば、親も一緒に来る。すると博物館の来館者が増えていく。学校現場をうまく使うことも1つの手だと思う。
- 以前、他の博物館の評価に対する国際シンポジウムをして、アメリカのビジタースタディアソシエーションや利用者研究の学会の会長を呼ぶなどしたが、なかなか定着しない。アメリカだとその専門のスタッフ・研究者がいる。博物館自体も民間からの予算を取って運営されているので、そもそも質・量についてデータが出ていないと日常の予算が取れない。これだけ興味のある委員がいるのなら、ワーキングなどをして少し整理をすれば日本の中で抜きん出ると思う。
- 「学芸員研究業績」に論文・講演はあるが、企画展を担当したことは入らないのか。
- このようなリストには、今回の資料でも担当だけ名前が入り、研究業績みたいな形で一覧にはなっていない。多分、何本担当したみたいな数値的なところはまだかと思う。論文は本数で数値化するが、展覧会はそこまで数が増えないので、数値化はしていないと思う。ただ、こういう形で誰が展示をしたか名前は出る。
- 他館では、逆に積極的に業績として、特別展などを担当したことなどが併せて掲載するところもあるので考えてみるといいのではないか。特別展・企画展に括弧で名前だけが挙がっているが、主担当やその他の分担など、もう少し積極的に表現してはどうか。

### 【ユニバーサルミュージアム】

- 高齢者向けのプログラムを作る中で、高齢者は視力・聴覚・味覚・嗅覚が衰えてくるが、触覚についてはかえって研ぎ澄まされていくことが分かってきたので、現在高齢

者に対するプログラムに触る行為をどう入れるのかを考えている。さまざまな対象についての対応策を考えようとしているがターゲットを絞り込んでいくと、より密度の濃い対応策が見えてくるのではないかと。

- 多言語化などにも対応しているようだが、これまでの取り組みを基に、今後展覧会などの中で活かす場面を具体的に考えているのか。例えば今年の「関門幕末維新伝」では、外国などの方々に向けてどのように発信するのか。またユニバーサルミュージアムで事業化された内容の事柄を受け、シーダー（ボランティア）など普及活動等に実際参加している方がどのように絡むのか、現時点で具体的に詰めていけば聞きたい。
- 自主企画の特別展で歴史系の場合、英文表記を付けることは間に合っていない。マンパワー、担い手も含めて不足している。今秋の「関門幕末維新伝」も同様である。昨年「大正・昭和の暮らしと風景展」でギャラリートークをしたが今回も同じように行い、他に事前に団体で相談してもらえば解説する場を設ける。例えば旅行社が外国の方を連れてきても通訳がいれば解説できる。団体ごとにきめ細かい対応は考えていきたい。
- 例えば甲冑について、工芸として優れた点があるのと同時に、家の何よりも大事にされ、守られてきた歴史がある。例えばこのような点を言語化し、海外に向け「日本特有の部分はここだ」というものを紹介してはどうか。
- 東南アジアの団体が来た際に短時間で案内して欲しいという要請がある。その際の常設展の案内について、まず航空写真で北九州の地理情報を伝え、夏祭りに関する展示で日本の風土や、信仰・文化などの話をした後、江戸時代にいき、外国人はだいたい城と武具に関心があるので、城や武具、また武士とはいかなるものかなどを話し、専門の近代史の話に持っていつている。このような解説を何回か客の反応を見ながらすると、解説を加えるべき点がおのずと分かってくるので、このような経験を踏まえ早急に取り組むべきと考えている。
- 中国・韓国との3館事業などで、衣食住についてテーマごとに考える予定があるが、学生も、その展示内容を中韓の博物館関係者が来た時に簡単に説明し、彼らがどんなふうに見ているかなどを調査する。来館者調査というわけではなく、いわゆる海外のミュージアムの有識者に対して意見を伺う機会をつくったりすると、貴重な機会になるのではないかと。
- 例えば三世代のファミリーで来たとき、広い館内を見るだけで祖父母世代は疲れてしまう。休憩椅子・ベンチなどを置いて高齢者にも配慮すると、休みながらゆっくり滞在でき、世代間のコミュニケーションを図りながら展示を楽しむことができると思う。
- 福岡市博の「アマゾン展」では前半の広いブースから後半に移っていくに従いまめに椅子が置いてあった。一方福岡市美の「ゴジラ展」では椅子はなかったが内容が面白かったのもあって、あまり気にならなかった。市博は小さい子連れの家族が多いのに対し、市美のゴジラ展は若い人から高齢者まで幅広い年齢層が来場していた。コンテツの違いがあるとは思いますが興味を持った。

### 【外部資金について】

- 科学研究費補助金（以下「科研費」という。）など外部資金を取る際、展覧会の計画と研究テーマをどのようにリンクさせているのか。個人の関心で研究をするのか、チー

ム、係などである程度中期的な計画を持って決めているのか。また近い将来にやってみたい研究分野、展覧会についてどのように考えているのか。

- 自然史系で外部資金を取る際は、これまで各学芸員がやってきた研究テーマを新しく、また深めていく形で応募している。今、科研費の申請書類に成果を展示することを記し、博物館内の学芸員が何人かで一緒にやっているものもある。同じ博物館内だけではなく他館や大学と一緒にできることもあると思う。博物館学が科研費の研究項目の一つになっているのでチャンスでもある。
- 歴史系は、収蔵資料が基本的には地元の物になるので、それを中心に毎年特別展、企画展を開催している。科研費等はあくまで各自研究の延長という形で申請をし、必ずしも特別展・企画展には結び付かないのが現状である。科研費の申請には研究をいかに社会に還元するかが重要になっているので考えていかなければならないと思う。
- 全国でも共通の課題だが、当館は市の直営で予算が減額される中、学芸員に十分な研究環境を整えることが厳しい時代が続いている。しかし質は落としたいくない。この二律背反を両立させるため、学芸員は本来追求しているテーマ、プラス付随するものの研究のため、あらゆる手段を通じて外部資金を獲得し、質を確保していく必要がある。幸い獲得額は毎年増えている状態なので、学芸員は頑張っているということで理解して欲しい。
- 1980年代に自然史博物館、考古博物館ができていたが、その当時10歳だった人は、小・中学生の親になっている。外部資金をとって小・中学校の保護者対象のアンケートを実施し、子ども時代に博物館に行ったか、子どもを博物館に連れていったか、など徹底的に調べてみたらどうか。また2002年に新博物館としてオープンした時に10歳だった人は、今は24、25歳。この人たちが3、40代になる時に、また同じような調査を北九州市の中学校・小学校を通してやるなどすれば貴重なデータになる。

### 【学校教育との連携】

- この夏、博物館で中学校の理科の教員の第1回夏季研修会を行ったが、展示物を見て学芸員の解説を聞くことや、バックヤードを見ることが好評だった。中でもジオパークについて関心が高かった。私が若い時にはジオパークを全て足で歩き、学芸員に教えてもらったことを授業の中で活かしていた。「すごい」と思ったことを伝えると、子どもたちが行ってみようという気になる。しかし、今の若い先生方は土日に部活動があり実際に足を運ぶのが難しく地元のことを知る機会を得づらい。ジオパークの普及活動の中に「野外観察会」があるが、日曜なので参加したくてもできない教職員がたくさんいる。可能なら夏休みに集中的にできないか。
- 博物館を活用した研修は大切である。教員が博物館に行きやすい環境を作る方法について、教員免許状更新講習を活用するのはどうか。京都では大学が文部科学省から免許状更新講習を受け会場を博物館にし、博物館で実物資料を活用する授業について知ってもらう。北九州市立大学で教員免許状更新講習をとって、それをいのちのたび博物館ですするという方法もある。
- 博物館は、小学校4年生が総合的な学習「環境アクティブラーニング」で訪問する環境に関する施設の一つとなっている。館内にスタンプラリーがあるが、子どもたちはそれだけを目的に走り回り内容が何も見えていない。小学生の校外学習は内容だけで

なく子どもたちにマナーを身に付けさせる大事な機会なので、そのためのルール作りなどを考えて欲しい。

- 博物館は「北九州市小学校児童科学作品展」の会場になっているが、社会科展もある。子どもたちの夏休みの自由研究を展示したもので入場者は子どもと大人を合わせると、大体 800～1,000 人くらい。会場は主に学校だが、よりたくさんの人にみてもらいたいので博物館も会場にさせて欲しい。

### **3 その他**

- 松井歴史課長より会議終了が宣言された。
- 閉会后、「恐竜博 2016」の見学を行った。

(議事録要旨作成：富岡優子)